

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る 唐詩の特徴的な用法について

高橋 未来*¹・佐藤 正光*²

中国古典学分野

(2015年8月28日受理)

要 旨

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』（中華書局，2014）は、張相著『詩詞曲語辭彙積』（中華書局，1953）と王瑛著『詩詞曲語辭例積』（中華書局，1980）より中華書局が重要な語彙を選び直し、あわせて王瑛・曾明德著『詩詞曲語辭集積』（語文出版社，1991）からも若干の語彙を抜き出して編纂しなおした書である。したがって本書は、中国古典作品における特殊な語法、すなわち異読を集大成したもので、唐詩を読み解くうえで欠くことのできない書と言って過言ではない。そこで本稿では、唐詩に見られる特徴的な用法を抜き出し、まずアルファベットによるピンイン表記でAからCまでに含まれた、語彙を訳出し、その特徴を明らかにする。そこには、日本の伝統的な古訓からは大きく異なる意味が見いだされる。

キーワード：唐詩，異読

はじめに

唐詩の読解は、我々日本人にとっては訓読という便利な方法によってある程度こなすことができている。また長い伝統によって、訓読のための辞典や訓読文法も整理されているが、はたして本当にそれで唐詩が解釈できているかどうか、これまで少なからず疑念があった。とくに張相著『詩詞曲語辭彙積』（中華書局，1953）その他の唐詩の用語の特殊な意味を示した辞典などを見てみると、その思いはますます強くなる。

そこで本研究では、唐詩の他の詩作品等の用語の異読について考証する第一段階として、最近、中華書局より刊行された『詩詞曲語辭辭典』を翻訳し、その解釈や用例の分析によって、唐詩読解のこれまでの常識を捉え直すことを目的としている。今回は、試行的に13項目の用語について翻訳を行った。

1. 欸乃 ǎi nǎi

①、舟歌、舟中の歌声。もとは湘楚地方の方言。元結¹「欸乃曲五首」（『全唐詩²』巻241）は、元結が湘水の南に位置する道州（現在の湖南省永州市道県）で刺史の任にあった際の作で、曲中で湘江と九嶷山に触れている。柳宗元³「漁翁」（『全唐詩』巻353）「曉汲清湘燃楚竹（曉に清湘を汲みて楚竹を燃やす）」。唐詩で「欸乃」の語を用いるとき、すべて湖南・湘江一帯の舟歌を指しているのは、偶然ではない。揚雄『方言⁴』巻10「欸、然也、南楚凡言然者曰欸、或曰「欸」（欸は、然なり、南楚の凡そ「然り」と言う者は「欸」と曰い、或いは「欸」

* 1 東京学芸大学非常勤講師

* 2 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野（184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1）

と曰う)。この「欸」字を、『広雅⁵』、『広韻⁶』はともに「膺⁷」に解する。これは発声の語である。清・銭繹『方言疏証⁸』巻 10「案今俗欸，諛二字俱音愛，相応曰欸，相惡曰諛，只在輕重之間（案ずるに今俗の「欸」，「諛」の二字は俱に音は「愛」，相い応ずるを「欸」と曰い，相い悪くを「諛」と曰う，只だ輕重の間に在り)」。従って「欸乃」の一語は，「欸」の字から発展した語である。「欸」の下に続く乃の字は「仍」の字に通じ，「欸乃」は舟歌でのかけあいである。

②，①の意味から，詩人が唱和するの派生義。元・許有壬⁹に「圭塘雜詠」二十四首があり，「圭塘欸乃」とも称す。その「与客泛舟（客と舟を泛ぶ）¹⁰」に「欸乃声中动画橈，不煩舟子更相招（欸乃声中 画橈動き，煩わず 舟子更に相い招くを)」，また「沙武口望武昌（沙武口にて武昌を望む）¹¹」に「好将身外無窮事，都付蒼浪欸乃声（好く身外に窮事無きを將て，都て付す 蒼浪欸乃の声)」。周伯琦¹²は「圭塘欸乃序」に「許有壬は圭塘¹³を所有し，『時杖屨携弟若子会賓友觴詠其間……此唱彼和，宮商遞宣，少長同驩，主賓相忘……故名其篇集曰欸乃，若漁歌互答然（時に杖屨と弟若子を携え，賓友と会して其の間に觴詠し……此れ唱い彼れ和し，商遞いに宣べ，少長共に驩び，主賓相い忘る……故に其の篇集に名づけて欸乃と曰う，漁歌の互いに答うが若く然り)』と述べている。これにより，遅くとも元代には「欸乃」の語が，漁歌のかけあいから派生して詩人の唱和を意味し，民間の素朴な歌謡が文人の風雅な遊びへと変化したことがわかる。

2. 拔 bá

回る，回転するの意。杜甫¹⁴「江漲（江 漲る）」（『全唐詩』巻 226）「漁人縈小楫，容易拔船頭（漁人 小楫を縈らせ，容易に船頭を拔らす)」。玄応『一切経音義¹⁵』巻 5「不必定入印経音義」「拔身，蒲沫反，迴也（拔身，蒲沫の反，迴らすなり)。「捉季布伝文」（『敦煌変文集¹⁶』所収）に，漢の高祖が季布に罵られて逃げたことを「拔馬揮鞭而便走。陣似山崩遍野塵（馬を拔らせ鞭を揮いて便ち走る。陣は山の崩るるが似くして野塵遍し)」と記す。「跋」も参照。

・「跋」bá 抜に同じ。回る，回転するの意。朱慶餘¹⁷「発鳳翊後塗中懷田少府（鳳翊を發して後，途中に田少府を懷う）」（『全唐詩』巻 514）「見酒連詩句，逢花跋馬頭（酒を見ては詩句を連ね，花に逢いては馬頭を跋らす)」，李商隱¹⁸「偶成転韻七十二句贈四同舍（偶たま転韻七十二句成りて四同舍に贈る）」（『全唐詩』巻 541）「明年赴辟下昭桂，東郊痛¹⁹哭辞兄弟。韓公堆上跋馬時，迴望秦川樹如薺（明年 辟に赴きて昭桂に下り，東郊痛哭して兄弟に辞す。韓公堆上 馬を跋らす時，秦川を迴望せば 樹は薺の如し)」，意はすべて「拔」に同じ。
【補考】ここに挙げられる例はすべて他動詞であるから，「まわす，めぐらす」とするのが適切かもしれない。

3. 罷 bà

時間補語「来（～から）」あるいは「去（～して）」に同じ。時間を示し，「時」または「後」の意。時間を示す名詞の働きをする。『先秦漢魏晉南北朝詩²⁰』梁詩巻 16 劉孝綽²¹「和詠歌人偏得日照詩（人の日照を偏に得るを詠歌するに和するの詩)」「屢將歌罷扇，廻拂影中塵（屢しば歌いし罷の扇を將い，廻らし拂う影中の塵)」，「歌罷」は，歌う時或いは歌った後の意。また巻 17 褚翔²²「雁門太守行」「三月楊花合，四月麥秋初。幽州寒食罷，鄭国采桑疏（三月楊花合し，四月麥秋の初め。幽州寒食の罷，鄭国采桑疏らなり)」は，寒食の後の意。杜甫「懷旧」（『全唐詩』巻 227）「老罷知明鏡，悲来望白雲（老い罷るを明鏡に知り，悲しみ来りて白雲を望む)」，同じく杜甫「雨晴（雨晴る）」（『全唐詩』巻 230）「雨時山不改，晴罷峽如新（雨時 山改まらず，晴れし罷峽は新たなるが如し)。「罷」は「来」，「時」と呼応²³し，「老罷」は「老来」或いは「老時」に同じ，「晴罷」は「晴時」或いは「晴後」に同じ。施肩吾²⁴「雜古詞²⁵」（『全唐詩』巻 26 雜曲歌辭）「憐時魚得水，怨罷商与參（時に魚の水を得るを憐れみ，罷に商の參と与にするを怨む)」。皇甫冉²⁶「閑居作」（『全唐詩』巻 250）「多病辞官罷，閑居作賦成（多病にして官を辞し罷り，閑居して賦を作りて成る)」，韓翃²⁷「送山陰姚丞携妓之任兼寄山陰蘇少府（山陰の姚丞の妓を携えて任に之くを送り，兼ねて山陰の蘇少府に寄す）」（『全唐詩』巻 243）「山陰政簡甚従容，到罷唯求物外蹤（山陰の政は簡にして甚だ従容，到りて罷唯だ物外を求めて蹤たるる)」，劉方

平²⁸「新春」(『全唐詩』卷251)「眠罷梳雲髻，粧成上錦車(眠めし罷雲髻を梳り，粧成りて錦車に上る)」，李商隱「鄂杜馬上念漢書(鄂杜にて馬上に漢書を念ず)」(『全唐詩』卷539)「世上蒼龍種，人間武帝孫，小來惟射獵，興罷得乾坤(世上蒼龍の種，人間武帝の孫，小來射獵を惟い，興なる罷乾坤を得たり)」。「興罷」と「小來」は対で，鼎盛の時をいう。韓愈²⁹「灑吏」(『全唐詩』卷341)「吏曰聊戲官，儂嘗使往罷(吏曰く，聊か官に戯れ，儂嘗て使いして往罷す)」は，「使いして往來する」の意。蘇軾³⁰「傅堯俞濟源草堂(傅堯俞の濟源草堂)」(『全宋詩』³¹卷789)「微官共有田園興，老罷方尋隱退廬(微官 共に有り田園の興，老い罷りて方に尋ぬ隱退の廬)」は，上に挙げた杜甫の詩と同じ意。「撒罷」の語も参照。

「罷」には停止，また完結するの意があり，完了を意味する動詞としても用いられる。『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷12王僧孺³²「詠寵姬詩(寵姬を詠ずるの詩)」「及君高堂還，值妾妍粧罷(君が高堂に還るに及び，妾は妍粧し罷うるに値う)」は，化粧が終わるの意。「時」，「後」の義が派生して形骸化したもの。

4. 半 bàn

ともに，全部の意。副詞。李白³³「宮中行樂詞」(『全唐詩』卷28雜曲歌辭)「艷舞全知巧，嬌歌半欲羞(艷舞全て巧なるを知り，嬌歌 半て羞ちんと欲す)」，杜甫「大曆三年春白帝城放船出瞿塘峽久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻(大曆三年の春，白帝城より船を放ちて瞿塘峽を出づ，久しく夔府に居り將に江陵に適かんとして漂泊し，詩有り凡て四十韻)」(『全唐詩』卷232)「書史全傾撓，裝囊半壓濡(書史全て傾撓し，裝囊半て壓濡せらる)」，韓愈「游城南十六首 題韋氏莊(城南に遊ぶ十六首 韋氏の莊に題す)」(『全唐詩』卷343)「架倒藤全落，籬崩竹半空(架倒れて藤全て落ち，籬崩れて竹半て空し)」，李商隱「細雨成詠獻尚書河東公(細雨詠成りて尚書河東公に献ず)」(『全唐詩』卷541)「半將花漠漠，全共草萋萋(半て將に花は漠漠，全て共に草は萋萋)」，「將」の意は「共」に同じ。両句の大意は「細かな雨の中に花が寂しげに咲き，草は生い茂っている」。以上の「半」はすべて「全」と対をなし，「半」の意は「全」に同じ。とくに李白と李商隱の詩句は「美人の艶やかな舞はあらゆるわざに習熟し，嬌しい歌は半ば恥じられる」および「細やかな雨が半ばにして，花は寂しげに咲き，一面の草が生い茂っている」と解釈すると，全く通じない。

杜甫「七月一日題終明府水樓(七月一日 終明府の水樓に題す)二首」(『全唐詩』卷231)「楚江巫峽半雲雨，清簾疏簾看弈棋(楚江巫峽 半て雲雨，清簾疏簾 弈棋を見る)」，趙次公注「公詩又云『楚山不斷四時雨，巫峽長吹千里風』是也³⁴ (公の詩に又た『楚山不斷四時の雨，巫峽長く吹く千里の風』と云うは是なり)」とある。趙注に拠れば「半雲雨」は「俱雲雨」の意。韓愈「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士(江陵に赴く途中，王二十補闕，李十一拾遺，李二十六員外の翰林三學士に寄贈す)」(『全唐詩』卷336)「上憐民無食，征賦半已休(上は民に食無きを憐れみ，征賦 半て已に休む)」は，順宗・永貞元年(805)に作られた詩である。『順宗實錄』³⁵に拠れば，この年「特詔逋稅悉皆蠲免³⁶ (特詔ありて，逋稅悉く皆な蠲免す)」とある。従って「半已休」は「俱已休」の意である。杜甫「舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄(舍弟觀の藍田に赴き妻子を取りて江陵に到り喜びて寄す)三首」(『全唐詩』卷231)「巡檐索共梅花笑，冷蘂疏枝半不禁(檐を巡りて梅花と共に笑わんことを索むれば，冷蘂疏枝半て禁えず)」とは，梅花の冷蘂も疏枝もすべて私に笑いかげずにはいられないとの意。李嘉祐³⁷「暮春宜陽郡齋愁坐忽枉劉七侍御新詩因以酬答(暮春宜陽の郡齋にて愁い坐するに忽ち枉劉七侍御の新詩あり，因りて以て酬答す)」(『全唐詩』卷207)「子規夜夜啼櫛葉，遠道逢春半是愁(子規は夜夜櫛葉に啼き，遠道春に逢いて半て是れ愁う)」，竇叔向³⁸「夏夜宿表兄話旧(夏夜表兄に宿りて旧を話る)」(『全唐詩』卷271)「去日兒童皆長大，昔年親友半凋零(去日 兒童皆な長大，昔年 親友半て凋零)」，「半」は「皆」と対。最後の例「半て凋零」は「多くが年老いている」と理解してよいが，「半分は年老いている」と解釈すべきではない。半には「俱に，全て」の意があり，ここから「おおむね」，「ほとんど」の意に派生した。

5. 崩騰 bēng téng

①，入り乱れるの意，連綿語³⁹。王維⁴⁰「勞將行」(『全唐詩』卷125)「漢兵奮迅如霹靂，虜騎崩騰畏蒺藜(漢兵 奮迅すること霹靂の如く，虜騎 崩騰して蒺藜を畏る)」，李白「贈張相鎬(張相鎬に贈る)二首」(『全唐詩』

卷 170)「**想象**⁴¹ 晋末時，崩騰胡塵起 (想象す晋末の時，崩騰して胡塵起こる)」，同じく李白「翫月金陵城西孫楚酒樓達曙歌吹日晚乘醉著紫綺裘烏紗巾与酒客数人棹歌秦淮往石頭訪崔四侍御 (月を金陵城西の孫楚の酒樓に翫^{たの}しみ，曙に達するまで歌吹し，日晚れて酔いに乗じて紫綺裘，烏紗巾を著け，酒客数人と秦淮に棹歌し，石頭に往きて崔四侍御を訪ぬ)」(『全唐詩』卷 178)「酒客十数公，崩騰醉中流 (酒客十数公，崩騰して中流に酔う)」，杜甫「送顧八分文学適洪吉州 (顧八分文学の洪・吉州に適くを送る)」(『全唐詩』卷 223)「崩騰戎馬際，往往殺長吏 (崩騰す戎馬の際，往往にして長吏を殺す)」，岑參⁴²「送許子擢第歸江寧拜親因寄王大昌齡 (許子の第に擢^{ぬき}んぜられて江寧に歸りて親に拜するを送り，因りて王大昌齡に寄す)」(『全唐詩』卷 198)「奔走朝万国，崩騰集百靈 (奔走して万国に朝^{まみ}え，崩騰して百靈を集む)」，劉禹錫⁴³「平蔡州 (蔡州を平らぐ) 三首」(『全唐詩』卷 356)「賊徒崩騰望旗拜，有若群蟄驚春雷 (賊徒崩騰して旗を望みて拜し，群蟄の春雷に驚くが若き有り)」。

②，派生して，慌ただしいとの意。高適「送蔡山人 (蔡山人を送る)」(『全唐詩』卷 213)「我今**踉蹌**無所似，看爾崩騰何若為」(我今**踉蹌**^{そうとう}して似る所無く，爾の崩騰なるを看るも何若為)。また「崩迫」，「崩危」も見よ。

・「崩迫」bēng pò 慌ただしい。李白「淮南臥病書懷寄蜀中趙徵君**蕤** (淮南にて病に臥して懷を書し，蜀中の趙徵君**蕤**に寄す)」(『全唐詩』卷 172)「功業莫成就，歲光屢崩迫⁴⁴ (功業成就する莫く，歲光屢しば崩迫なり)」，杜甫「催宗文樹雞柵 (宗文を催^{うなが}して雞柵を樹てしむ)」(『全唐詩』卷 221)「吾衰怯行邁，旅次展崩騰 (吾衰えて行邁を怯れ，旅次 崩迫を展ぶ)」は，旅の途中に慌ただしい気分を和らげるの意。「崩騰」を見よ。

・「崩危」bēng wēi 焦り，恐れる。陳子昂⁴⁵「感遇」(『全唐詩』卷 83)「拳跼競万仞，崩危走九冥 (拳跼して万仞を競い，崩危して九冥に走る)」。下の句は，焦り危惧しながら深い谷の中を歩くとの意。ある注釈では，「山石が崩落する危険を冒して深い谷の中を歩く」と解するが，妥当ではない。「崩騰」を見よ。

6. 比来 bǐ lái

①，「比」または「比来」につくる。「比」は過去を指し，「来」は時の意。ただし時間の経過から見れば，遠近いずれを指すかの違いがある。遠くを指すときは「従前」，「往昔」，近くを指すときは「近来」に当たる。顧況⁴⁶「悼雛 (雛を悼む)」(『全唐詩』卷 267)「稚子比来騎竹馬，猶疑只在屋東西 (稚子 比来 竹馬に騎る，猶お疑う 只だ屋の東西に在るか)」は「従前」，「往昔」の意。清昼⁴⁷等「秋日盧郎中使君幼平泛舟聯句 (秋日盧郎中使君幼平の舟を泛ぶ聯句) 一首」(『全唐詩』卷 794)「共載清秋客船，同瞻**卓**蓋朝天。悔使比来相得，如今欲別潸然 (共に載る清秋の客船，共に瞻る**卓**蓋の朝天。悔ゆらくは 比来相い得るも，如今別れんと欲して潸然たらしむるを)」，武則天⁴⁸「如意娘」(『全唐詩』卷 5)「不信比来長下淚，開箱驗取石榴裾 (比来長く涙下るを信ぜずんば，箱を開けて驗取せよ石榴の裾)」。意はみな同じ。以上は遠称である。

杜甫「季夏送鄉弟韶陪黃門從叔朝謁 (季夏 鄉弟の韶の黃門の從叔に陪して朝謁するを送る)」(『全唐詩』卷 231)「令弟尚為蒼水使，名家莫出杜陵人。比来相国兼安蜀，歸赴朝廷已入秦 (令弟尚お蒼水の使^たり，名家 杜陵の人より出づる莫し。比来 相国 兼ねて蜀を安んじ，歸りて朝廷に赴くに已に秦に入る)」，杜甫の自注に「韶比兼開江使 (韶は比ごろ開江使を兼ね)」とある。案ずるに，この詩は大曆三年 (768) 以前，杜甫が夔州にいた際の作で，「相国」は杜鴻漸を指す。鴻漸は大曆元年二月に山南西道，劍南，東西川等道の副元帥となり，八月に蜀に至り，大曆二年に入朝した。「比来」及び杜甫の注の「此」はみな近い時を指す。韓翃⁴⁹「送襄垣王君歸南陽別墅 (襄垣王君の南陽の別墅に歸るを送る)」(『全唐詩』卷 245)「少婦比来多遠望，應知**罽**子上羅巾 (少婦比来遠望すること多く，應に知るべし **罽**子の羅巾に上るを)」，李商隱「代秘書贈弘文館諸校書 (秘書に代わりて弘文館の諸校書に贈る)」(『全唐詩』卷 540)「清切曹司近玉除，比来秋興復何如 (清切たる曹司 玉除に近し，比来 秋興 復た何如)」，仲并⁴⁹「浣溪沙」詞(『全宋詞』⁵⁰)「雅称詩人美孟都。清新幽韻比来無。新來学得綉工夫 (雅称す詩人美しき孟の都て，清新なる幽韻 比来無く，新來 学び得たり 綉の工夫)」，『六十種曲』⁵¹「紫釵記」劇二「比来流寓長安，占籍新昌客里 (比来 長安に流寓し，籍を新昌の客里に占う)」，曾瑞卿⁵²的小令「迎仙客・閨情」⁵³「愁滿懷，淚盈腮，愁泪比来深似海 (愁いは懷に満ち，涙は腮に盈ち，愁泪 比来深きこと海の似し)」。意はみな上の例と同じ。「比①」を見よ。

②、「比」には「本」の意があり、「比来」も同様の用法があり、「本来」というのに等しい。崔塗⁵⁴「金陵晚眺」(『全唐詩』卷679)「何必登臨更惆悵，比来身世只如浮(何ぞ必ずしも登臨して更に惆悵せん，比来身世 只だ浮かぶが如し)」，比は一に「本」に作る。李温⁵⁵「同舍弟恭歲暮寄青⁵⁶ 李州六協律三十韻(同舍弟の恭 歲暮に青州の李六協律に寄す三十韻)」(『全唐詩』卷370)「比来胸中氣，欲耀天下奇。雲雨沛蕭艾，煙閣双葳蕤。幾年困方柄，一旦迷多岐(比来 胸中の氣，天下に奇を耀かさんと欲す。雲雨 沛なる蕭艾，煙閣 双つながら葳蕤たり。幾年か方柄なるに困しみ，一旦 多岐に迷う)」，王建⁵⁷「对酒(酒に対す)」(『全唐詩』卷301)「為病比来渾断絶，緑花不免却知聞(病と為りて比来渾て断絶するも，花に縁りて知聞を却くるを免れず)」，張籍⁵⁸「寄白二十二舍人(白二十二舍人に寄す)」(『全唐詩』卷385)「三省比来名望重，肯容君去楽樵漁(三省 比来 名望重かれども，肯て容る 君去きて樵漁を楽しむを)。上に挙げた数例は，上下句の間の語調に明らかな転折があり，「比来」と「却」，「肯」等の字が対応する。ゆえに「本来」の意である。

7. 必 bi

虚詞で，「倘し」，「若し」，「如し」，「或いは」の意。決定するの意味の反義語。杜甫「丹青引 贈曹將軍霸(丹青引 曹將軍霸に贈る)」(『全唐詩』卷220)「將軍画善蓋有神，必逢佳士写真(將軍 画を善くすること蓋し神有り，必し佳士に逢わば真を写さん)」，「必逢」は「倘逢」の意。杜甫「送韋諷上閩州録事參軍(韋諷の閩州の録事參軍に上るを送る)」(『全唐詩』卷220)「必若救瘡痍，先応去蠹賊(必若 瘡痍を救わんとせば，先ず応に蠹賊を去るべし)」，「必若」は「倘若」の意。「必」も「若」も擬辭である。元稹⁵⁹「当来日大難」(『全唐詩』卷20 相和歌辭)「泥潦漸久，荆棘旋生，行必不得，不如不行(泥潦 漸く久しきも，荆棘 旋で生ず，行きて必し得ざれば，行かざるに如かず)」，「必不得」は「若不得」または「如不得」の意で，「必」と「不如」は対である。杜荀鶴⁶⁰「題会上人院(会上人の院に題す)」(『全唐詩』卷691)「必能行大道，何用在深山(必し能く大道を行えば，何ぞ用つて深山に在る)」，「必能」は「倘能」。同じく杜荀鶴「恩門致書遠及山居因献之(恩門の書を致して遠く山居に及ぶ，因りて之に献ず)」(『全唐詩』卷692)「必許酬恩酬未晚，且須容到九華山(必し恩に酬ゆるを許されて酬ゆること未だ晩からざれば，且に九華山に到るを容されんことを須めん)」，「必許」は「倘許」。貫休⁶¹「送新羅人及第歸(新羅の人の及第して歸るを送る)」(『全唐詩』卷836)「到郷必遇來王使，与作唐書寄一篇(郷に到りて必し王使の來たるに遇えば，与に唐書を作りて一篇を寄せん)」，「必遇」は「倘遇」，「來王使」は，王の使臣が來るとの意。同じく貫休「春送趙文觀送故合州座主神樞歸洛(春に趙文觀が故の合州の座主の神樞の洛に歸るを送るを送る)」(『全唐詩』卷837)「他年必立吾君側，好把書紳答至公(他年必し吾が君の側に立たば，好く書紳を把りて至公に答えん)」，「必立」は，「倘立」の意。蘇軾「玉樓春」詞「宿造口寄子由才叔⁶²(造口に宿りて，子由・才叔に寄す)」(『全宋詞』)「尊前必有問君人，為道別來心与緒(尊前必し君を問うの人有らば，為に道わん別來たるも心と緒と与にすと)」，「必有」は，「倘有」の意。白居易⁶³「哭李三(李三を哭す)」(『全唐詩』卷433)「哭君仰問天，天意安在哉。若必奪其寿，何如不与才。(君を哭し仰ぎて天に問う，天意は安くにか在りや。若し必其の寿を奪えば，何ぞ才を与えざるに如かん)」，「若」と「必」は同じ意味の語を重ねた表現，「必若」に同じ。同じく白居易「病眼花(眼花を病む)」(『全唐詩』卷451)「必若不能分黑白，却心無悔復無尤(必若黑白を分かつ能わざれば，却つて心に悔ゆる無く復た尤む無かるべし)」，「必若」の意味は前を見よ。韓偓⁶⁴「雷公」(『全唐詩』卷681)「必若有蘇天下意，何如驚起武侯龍(必若天下の意を蘇すこと有らば，何如に武侯の龍を驚起せん)」，杜荀鶴「訪蔡融因題(蔡融を訪ね，因りて題す)」(『全唐詩』卷692)「必若天工主人事，肯教⁶⁵吾子委衡茅(必若天工 人事を主れば，肯て吾子に交わるに衡茅に委ねしや)」，貫休「送僧歸天台寺(僧の天台寺に歸るを送る)」(『全唐詩』卷832)「必若雲中老，他時得有隣(必若雲中に老ゆれば，他時 隣り有るを得ん)」，「必若」の意はすべて同じ。白居易「崔州宣大夫閣老忽以近詩數十首見示吟諷之下竊有所喜因成長句寄題郡齋(崔州の宣大夫閣老忽ち近詩數十首を以て示され，吟諷の下，竊かに喜ぶ所有り，因りて長句成りて郡齋に題するを寄す)」(『全唐詩』卷458)「謝玄暉歿吟声寢，郡閣寥寥筆硯閑……忽驚歌雪今朝至，必恐文星昨夜還(謝玄暉 歿して吟声寢み，郡閣寥寥として筆硯閑なり……忽ち驚く歌雪今朝至るを，必いは恐る文星昨夜還るを)」，「必恐」は「倘恐」，または「或恐」の意。「恐」も仮に擬えるの意味。張喬⁶⁶「谷口」(『全唐詩』卷639)「晴朝采藥尋源去，必恐雲深見異人(晴朝 藥を采りて源を

尋ね去き、^{ある}必いは恐る雲深くして異人見^{あら}わるとか)、同じく張喬「送友人遊蜀(友人の蜀に遊ぶを送る)」(『全唐詩』638)「必恐臨邛客, 疑君学賦非(必いは恐る臨邛の客, 君の賦を学ぶを疑うに非ざるかと)」, 方干⁶⁷「送王霖赴拳(王霖の拳に赴くを送る)」(『全唐詩』卷 651)「須憑吉夢為先兆, 必恐長才偶盛時(須く吉夢に憑りて先兆と為すべし, 必いは恐る長才盛時に偶うかと)」, 偶とは、不偶に遇うの意。同じく方干「獻王大夫(王大夫に献ず)二首」(『全唐詩』卷 652)に「必恐借留終不遂, 越人相顧已先愁(必いは恐る借留終に遂げず, 越人相顧みて已に先に愁うを)」, 「必恐」はすべて同じ意。

「必」が「倘」, 「若」を意味することは、古くより見られる。『論語⁶⁸』顔淵篇に「子貢曰『必不得已而去, 於斯三者何先』。孔子曰『去兵』。子貢曰『必不得已而去, 於斯二者何先』。孔子曰『去食』(子貢曰く、『必し已むを得ずして去らば, 斯の三者において何をか先にせん』と。孔子曰く『兵を去れ』と。子貢曰く『必し已むを得ずして去らば, 斯の二者において何をか先にせん』と。孔子曰く『食を去れ』と)」とあり, 「必不得已」は「倘不得已」, 「若不得已」の意。『春秋左氏伝⁶⁹』昭公十五年「必求之, 吾助子請(必し之を求むれば, 吾は子の請うを助けん)」, 「必求之」は「倘求之」, 「若求之」の意。『史記⁷⁰』封禪書「陛下必欲致之, 則貴其使者, 令有親屬, 以客礼待之, 勿卑。使各佩信印, 乃可使通言于神人(陛下は必し之を致さんと欲せば, 則ち其の使者を貴び, 親屬を有らしめ, 客礼を以て之に待し, 卑しむ勿かれ。各おのをして信印を佩びしめ, 乃ち言を神人に通ぜしむるべし)」, 「秦皇帝不得上封, 陛下必欲上, 稍上即無風雨, 遂上封矣(秦の皇帝は上りて封ずるを得ず, 陛下必し上らんと欲せば, 稍や上りて即ち風雨無くんば, 遂に上りて封ぜん)」, 「必欲」は「倘欲」の意。以上の例が傍証となる。

8. 畢竟 bì jìng

①, いったい, 結局の意。王維「哭殷遙(殷遙を哭す)二首」(『全唐詩』卷 125)「人生能幾何, 畢竟歸無形(人生能く幾何ぞ, 畢竟無形に歸す)」, 李商隱「早起(早に起く)」(『全唐詩』卷 540)「鶯啼花又笑⁷¹, 畢竟是誰春(鶯啼いて花又た笑う, 畢竟是れ誰が春ぞ)」。

②, 必ずの意。肯定の語気を強める副詞。僧如晦⁷²「卜算子」送春(『全宋詞』)「有意送春歸, 無計留春往⁷³。畢竟年年用著來, 何似休歸去(意有りて春の歸るを送るも, 計無し春の往くを留むるを。畢竟年年用い著き来たれば, 何似ぞ歸去するを休めん)」は、毎年必ず春が来るのだから、春が過ぎ去るのは仕方ないの意。明・沈泰『盛明雜劇⁷⁴』二集・葉憲祖「團花鳳」劇一「難得舅母好意, 把此椿好事作成了我, 一箇如花似玉的小姐霎時落在我手里。畢竟還有許多金珠首飾, 豈不一舉兩得(舅母の好意が得られなくても, この好事を私のために成功させ, 花玉のようなお嬢さんを即座に手中に収めよう。きつともっと沢山の首飾りがあるのだろう, 一挙兩得といかないものか)」, 明・馮夢龍『挂枝兒⁷⁵』卷七「花心採到手, 花心還未開。早是爾無心也。花, 我畢竟不來採(花蕊を取って手にしたが, 花蕊はまだ開いていない。もはやあなたには心がないのか, 花よ, 私は絶対に摘みに来ない)」, 意味は同じ。「畢竟」のこの用法は、散文に特徴的である。明・東魯の古狂生『醉醒石⁷⁶』第二回「巡檢道『怎麼弓兵与爾熟?』婦人道『是表兄。』巡檢道『畢竟還有緣故!』又要撈。婦人只得又将平日通姦, 怪他碍眼, 欲行害他緣故供出(巡檢が言う「どうして弓兵とあんたとは親しいの」。婦人は言う「あのひとは従兄弟なんですよ」。しかし巡檢は「きつともっと訳があるに違いない」とまたせまった。婦人はまた平日に不倫したが, 彼の邪魔をいぶかり, 二人の件を知られないようにした)」, 明・凌蒙初『二刻拍案驚奇⁷⁷』卷 3「(謝芳卿)暗想『他外貌已是如此, 少年進学, 内才畢竟也好』((謝芳卿)は秘かに思いめぐらした, 「彼の外見はこんな風だし, 若い頃から勉強しているから, きつと才能もあるはずだ」と)。

・「必竟」bì jìng「畢竟」に同じ。貫休「偶作因懷山中道侶(偶作 因りて山中の道侶を懷う)」(『全唐詩』卷 836)に「必竟輸他常寂默, 只心贏得苦沈淪(必竟 他を輸して常に寂默す, 只だ心に贏し得たり苦だ沈淪するを)」, 曹松⁷⁸「広州貽匡緒法師(広州にて匡緒法師に貽る)」(『全唐詩』卷 717)「必竟懶過高坐寺, 未能全讓法雲師(必竟 懶に過ぎる高坐の寺, 未だ全讓する能わず法雲師)」, 『南宋六十家集⁷⁹』周弼⁸⁰「會稽山」に「必竟興亡誰可料, 但聞陵谷變飛塵(必竟 興亡は誰か料るべき, 但だ聞く陵谷の飛塵に變ずるを)」。

・「止竟」zhǐ jìng「必竟」に同じ。元稹「六年春遣懷（六年春 懐いを遣る）八首」（『全唐詩』卷404）「止竟悲君須自省，川流前後各風波（止竟 君の自省を須むるを悲しむ，川流 前後 各おの風波あり）」，司空圖⁸¹「狂題十八首」（『全唐詩』卷634）「止竟閑人不愛閑，只像無事閉柴関（止竟 閑人 閑を愛さず，只だ事無きを像みて柴関を閉ざす）」，韋莊⁸²「贈戍兵（戍兵に贈る）」（『全唐詩』卷696）「止竟有征須有戰，洛陽何用久屯軍（止竟 征有りて須く戦い有るべし，洛陽何ぞ用いん久しく軍を屯するを）」，同じく韋莊「上元県」（『全唐詩』卷697）「止竟霸関何物在，石麟無主臥秋風（止竟 霸関 何物か有る，石麟 主無く秋風に臥す）」，同じく韋莊「古別離」（『全唐詩』卷700）「止竟多情何処好，少年長抱長⁸³年悲（止竟 多情 何れの処か好し，少年 長く抱く長年の悲しみを）」。

・「至竟」zhì jìng「止竟」に同じ。杜牧⁸⁴「題橫江館（橫江館に題す）」（『全唐詩』卷523）「至竟江山誰是主，苔磯空属釣魚郎（至竟 江山 誰か^{これ}が主なる，苔磯 空しく属す釣魚郎）」，同じく杜牧「題桃花夫人廟（桃花夫人の廟に題す）」（『全唐詩』卷523）「至竟息亡縁底事，可憐金谷墜樓人（至竟 息の亡ゆるは縁底事ぞ，憐れむべし金谷墜樓の人）」，羅隱⁸⁵「錢塘江潮」（『全唐詩』卷658）「至竟朝昏誰主掌，好騎鱸鯉問陽侯（至竟朝昏 誰か主掌す，好く鱸鯉に騎りて陽侯に問わん）」，同じく羅隱「故都」（『全唐詩』卷662）「至竟不如隋煬帝，破家猶得到揚州（至竟 如かず隋の煬帝の，破家して猶お揚州に到るを得るを）」，同じく羅隱「関亭春望」（『全唐詩』卷662）「未知至竟將何用，渭水涇川一向流（未だ知らず 至竟將た何をか用いん，渭水涇川一向に流る）」，羅鄴⁸⁶「冬夕江上言事（冬夕 江上に事を言う）五首」（『全唐詩』卷654）「逢人拳止皆言命，至竟謀閑可勝忙（人に逢いては皆命と言うも，至竟 閑を謀るは忙に勝るべし）」。

9. 不妨 bù fāng

①，予想せず，知らぬ間にの意。李商隱「漫成三首」（『全唐詩』卷539）「不妨何范尽詩家，未解当年重物華。遠把龍山千里雪，將來擬並洛陽花（^{おぼ}妨えず何范 尽く詩家たるを，未だ解せず当年物華を重んずるを。遠く龍山の千里の雪を把り，^も將ち來たりて 擬えて洛陽の花に並す）」，予想せず，予期せずの意。賈島⁸⁷「寄令狐綯相公（令狐綯相公に寄す）」（『全唐詩』卷573）「豈有斯言玷，應無白璧瑕。不妨円魄里，人亦指蝦蟇（豈に有らん斯言の玷，應に無かるべし白璧の瑕。妨えず円魄の里，人は亦た蝦蟇を指す）」，陸龜蒙⁸⁸「顧道士亡弟子奉束帛乞銘于襲美因賦戲贈（顧道士亡し，弟子は束帛を奉じ，銘を襲美に乞う，因りて賦して戯れに贈る）」（『全唐詩』卷626）「童初真府召為郎，君与抽毫刻便房。亦謂神仙同許郭，不妨才力似班揚（童初 真府 召されて郎と為り，君は毫を抽くに与りて便房に刻す。亦た謂う 神仙は許郭に同じきも，妨えず才力は班揚に似たると）」，元好問⁸⁹「右丞文献公著色鹿図（右丞文献公の著色鹿図）」（『元好問全集⁹⁰』卷13）（「不妨右相丹青筆，時到霜林紫翠間（妨えず右相 丹青の筆，時に到る霜林紫翠の間）」，意味は上の例と同じ。杜荀鶴「白髮吟」（『全唐詩』卷692）「一莖兩莖初似糸，不妨驚度少年時（一莖兩莖初め糸の似し，妨えず驚く少年の時を度るを）」，同じく杜荀鶴「投宣諭張侍郎乱後遇毗陵（宣諭を張侍郎に投じて，乱後毗陵に遇う）」（『全唐詩』卷692）に「聞道中興重人物，不妨西去馬蹄輕（聞く^{なら}中興 人物を重んずると，妨えず西去して馬蹄輕し）」，これらはみな，覚えぬの意。元好問「贈任丈耀卿（任丈耀卿に贈る）」（『元遺山集』卷13）「袖手名城得海藏，不妨身与世相忘（袖手 名城 海藏を得て，妨えず身と世と相い忘る）」，辛棄疾⁹¹「臨江仙」詞「戲為期思詹老壽（戯れに期思詹老の為に^{ことほ}壽ぐ）」（『全宋詞』）「七十五年無事客，不妨兩鬢如霜（七十五年事無きの客，妨えず兩鬢霜の如し）」，賀鑄⁹²「望書歸」詞（『全宋詞』）「辺候遠，置郵稀。附与征衣襯鉄衣。連夜不妨頻夢見，過年惟望得書歸（辺候遠く，郵を置くこと稀なり。征衣と襯鉄衣とを附与す。連夜妨えず頻りに夢見，過年惟だ望む書を得て歸るを）」，意はいずれも同じ。「妨」の字はまた「放」に作る。

②，とても，十分の意味を表す。『敦煌變文字義通釈⁹³』第五版445頁「不方，不妨，無妨」の条に「也是甚辭，‘很’的意思（甚だしいの意，「とても」の意味）」と記し，『変文』四例と『景德伝灯録』二例を挙げる。この種の「不妨」の用法は詩中にもあり，数例を加えて証拠としたい。羅隱「鷹」（『全唐詩』卷659）「眼惡藏蜂（一作鋒）在，心粗逐物殫。近來脂膩足，驅遣不妨難（眼悪く藏蜂（一に鋒に作る）に在り，心粗にして物の殫くるを逐う。近來脂膩の足，不妨だしきの難を驅遣す）」，甚だしい災難を払いのけるとの意。文与可⁹⁴「訪

李夙山人隱居 (李夙山人の隱居を訪ぬ) (『全宋詩』卷 438) に「状貌不妨古, 言談何太文 (状貌 不妨だ古く, 言談何ぞ太だ文なる)」。上海三聯書店影印『宋詩鈔』484 頁「石屏詩鈔・送裴⁹⁵明府」 「県債三年了, 郷心万里飛。一身如許瘦, 百姓不妨肥 (県債三年了わり, 郷心万里に飛ぶ。一身は如許か瘦するも, 百姓は不妨だ肥ゆ)」、用法は上の例に同じ。楊万里⁹⁶「雪凍未解散策郡圍 (雪凍りて未だ解けず, 郡圍を散策す) (『全宋詩』卷 2285) に「積雪偏工霽後凝, 不妨冷極不妨清 (積雪偏えに工にして霽れて後に凝る, 不妨だ冷やかなること極まり不妨だ清し)」、とても冷たくて清らかとの意。「冷」の前に「不妨」といい、後に「極」というのは、七言の字数にあわせるためである。

・「不放」bú fàng「不妨①」に同じ。予想せず, 知らぬ間にの意。司空図「寓居有感 (寓居して感ずる有り) 三首」(『全唐詩』卷 633)「不放残年却到家, 銜杯懶更問生涯 (放えず残年却て家に到り, 杯を銜えて懶に更に生涯を問う)」。

10. 裁 cái

①, 作る, 成るの意の動詞。最もよく見える用法は「裁詩」, 「裁辞」の類。杜甫「江亭」(『全唐詩』卷 226)「故林帰未得, 排悶強裁詩 (故林帰ること未だ得ず, 悶えを排わんとして強いて詩を裁る)」、李商隠「漫成」(『全唐詩』卷 540)「沈宋裁辞矜変律, 王楊落筆得良朋 (沈宋 辞を裁りて変律を矜り, 王楊 筆を落として良朋を得)」、二例ともに「詩を作る」の意。裁は名詞にもなり, 作品を意味する。皇甫湜⁹⁷「題浯溪石 (浯溪石に題す) (『全唐詩』卷 369)「子昂感遇佳, 未若君雅裁 (子昂の『感遇』佳きも, 未だ君の雅裁に若かず)」、孟郊⁹⁸「雪」(『全唐詩』卷 375)「強起吐巧詞, 委曲多新裁 (強いて起きて巧詞を吐りし, 委曲 新裁多し)」、二例は共に「雅作」, 「新作」の意。この種の用法は、『辞源』や『辞海』等の書に収録されているので、贅言しない。

②, 詔, 書, 曲, 文などの文書と口頭の創作すべてに「裁」を用いてよい。裁は詩詞中で「成」, 「作」の意を表す用法で, 「裁詩」, 「裁辞」の二語に限らない。柳宗元「楊尚書寄彬筆知是小生本様令更商榷使其功輒獻長句 (楊尚書が彬筆を寄せ, 知るは是れ小生の本との様なるを, 令して更に商榷して其の功を尽くせしめ, 輒ち長句を獻ず) (『全唐詩』卷 351)「尚書旧用裁天詔, 内史新将写道經 (尚書旧と用いて天詔を裁り, 内史新たに將いて道經を写す)」、陸龜蒙「奉和襲美酬前進士崔潞盛製見寄因贈至一百四十言 (襲美が前の進士崔潞に酬ゆる盛製寄せらるるに奉和し, 因りて贈りて一百四十言に至る) (『全唐詩』卷 618)「搜得万古遺, 裁成十編書 (万古の遺を搜し得て, 十編の書を裁成す)」、花蕊夫人⁹⁹「宮詞」(『全唐詩』798)「宣徽旋進新裁曲, 学士争吟应詔詩 (宣徽 旋で進む新裁の曲, 学士 争い吟ず应詔の詩)」。明・尚仲賢『洞庭湖柳毅伝書¹⁰⁰』劇四「説不尽星斗文章, 都裁作风流話兒講 (説くも尽くせず星斗の文章, 都て風流の話兒を裁作して講ぜん)」。詔, 書, 曲, 文一切の書と口頭の創作はすべて「裁」の語を用いることができる。

③, さらに多くの事物の制作にも「裁」を称す。王建「同于汝錫賞白牡丹 (于汝錫と同一に白牡丹を賞す) (『全唐詩』卷 299)「暁日花初吐, 春寒白未凝, 月光裁不得, 蘇合点難勝 (暁日花初めて吐き, 春寒白きこと未だ凝らず, 月光裁りて得ず, 蘇合¹⁰¹点ずるも勝ち難し)」、牡丹の白さは, 月光すらも作り出せないとの意。沈亜之¹⁰²「題海榴樹呈八叔大人 (海榴の樹に題して八叔大人に呈す) (『全唐詩』卷 493)「染日裁霞深雨露, 凌寒送暖占風煙 (染日 霞を裁りて雨露深く, 凌寒 暖を送りて風煙を占う)」、これは榴の花の赤さがもやのようである, もやとなるの意。王叡¹⁰³「竹」(『全唐詩』卷 505)「翠筠不樂湘娥泪, 斑籜堪裁漢主冠 (翠筠 樂まず湘娥の泪, 斑籜 裁るに堪う漢主の冠)」、元稹「和李校書新題樂府十二首 華原磬 (李校書の新題樂府十二首に和す 華原磬) (『全唐詩』卷 419)「泗滨浮石裁為磬, 古樂疏音少人聽 (泗滨 浮石 裁りて磬と為し, 古樂 疏音 人の聽くもの少なし)」、李商隠「玄微先生」(『全唐詩』卷 539)「龍竹裁輕策, 鮫綉熨下裳 (龍竹 輕策を裁り, 鮫綉 下裳を熨す)」、項斯¹⁰⁵「古扇」(『全唐詩』卷 554)「昨日裁成奪夏威, 忽逢秋節便相違 (昨日裁成して夏威を奪うも, 忽ち秋節に逢いて便ち相違)」、皮日休¹⁰⁶「以紗巾寄魯望因而有作 (紗巾を以て魯望に寄せて因りて作る有り) (『全唐詩』卷 613)「掩斂乍疑裁黑霧, 輕明渾似戴玄箱 (掩斂すれば

乍ち疑うらくは黒霧を裁るか^つと、軽明なること渾て玄箱を戴くに似る^{すべ})), 陸龜蒙「奉和襲美太湖詩二十首 太湖石 (襲美の太湖詩二十首に奉和す 太湖石)」(『全唐詩』卷 618)「或裁基棟宇, 礪^つ成^す成^る殿 (或いは基棟宇を裁り, 礪^つ成^す成^る殿 成る)」, 同じく陸龜蒙「正月十五日惜春寄襲美 (正月十五日春を惜しみて襲美に寄す)」(『全唐詩』卷 624)「見織短篷裁小楫, 拏煙閑弄箇漁舟 (短篷を織りて小楫を裁るを見, 煙を拏きて閑に弄ぶ箇の漁舟)」。孫光憲¹⁰⁷「生查子」詞(『全宋詞』)「夢難裁, 心欲破, 泪逐檐声墮 (夢は裁り難く, 心は破れんと欲し, 泪は檐声を逐いて墮つ)。「冠」, 「磬」, 「策」, 「扇」, 「霧」, 「楫」, 「夢」など具体的な物をすべて「裁」という。この用法は, 古くは前漢の散文に遡って見える。『説苑¹⁰⁸』雜言「是以君子相其土地而裁其器, 觀其俗而和其風, 総衆議而定其教 (是を以て君子は先ず其の土地に相して其の器を裁り, 其の俗を觀て其の風に和し, 衆議を総じて其の教えを定む)」。

11. 蒼茫 cāng máng

困惑する, 失望するの意。蔣紹愚『唐詩語言研究¹⁰⁹』316頁「蒼茫」[除了形容景色的荒寂, 地域的曠遠外, 還可以指人的精神狀態, 有‘迷茫, 悵惘’之義 (荒涼とした景色や広々として果てしない土地を形容する他に, 人の精神狀態を示して「迷茫, 悵惘」の意味がある)]とあり, 杜甫の詩五首を挙げる。按ずるに, 杜甫の詩以外にも唐宋の詩と散文にもこの用法が特徴的なので, 数例を挙げて明らかにしたい。王維「哭殷遙 (殷遙を哭す)」(『全唐詩』卷 125)「蕭条聞哭声, 浮雲為蒼茫 (蕭条として哭声聞こえ, 浮雲蒼茫と為る)」, 范成大¹¹⁰「晚登木瀆小樓 (晩に木瀆の小樓に登る)」(『全宋詩』卷 2269)「万象当樓翻繡張, 欄干一士立蒼茫 (万象 樓に当たりて翻繡張り, 欄干 一士立ちて蒼茫たり)」, 同じく范成大「海棠欲開雨作 (海棠開かんと欲して雨ふる作)」(『全宋詩』卷 2271)「春睡花枝醉夢回, 安排銀燭照粧台。蒼茫不解東風意, 政用此時吹風來 (春睡花枝 醉夢回り, 銀燭を安排して粧台を照らす。蒼茫 解さず東風の意, 政に此の時を用つて 風吹き來たる)」, 楊万里「午睡起 (午睡より起く)」(『全宋詩』卷 2279)「日脚何曾動, 桐陰有底忙。倦來聊作睡, 睡起更蒼茫 (日脚 何ぞ曾て動かん, 桐陰底ぞ忙しきこと有らん。倦み來りて聊か睡を作し, 睡りより起きて更に蒼茫す)」, 張文潜¹¹¹「歲暮即事寄子由先生 (歲暮即事 子由先生に寄す)」(『張耒集』卷 18¹¹²)「瞻望身空老, 蒼茫歲欲除 (瞻望するも身は空しく老い, 蒼茫として歲除せんと欲す)」には「迷茫, 悵惘」の意が明らかである。また梁・元帝蕭繹¹¹³『金樓子¹¹⁴』卷 6「(何承天) 又与林公道人同太祖坐, 常令二人棋。林公指三棋謂承天曰『惟當承流, 直戮此三豎』。詠此言至于再三。承天汗浹背, 恍惚蒼茫, 遂致失局 ((何承天) は又た林公道人と同一太祖坐し, 常に二人をして棋せしむ。林公は三棋を指して承天に謂いて曰く「惟だ當に流れを承けて, 直だ此の三豎を戮せよ」と。此の言を詠ずること再三に至る。承天は汗背を浹り, 恍惚蒼茫として, 遂に失局を致す)」, 意味は同じ。六朝時代にはこの用法があったことがわかる。

12. 側塞 cè sāi

満ちている様子。側は, 逼迫しているの意。杜甫「大雲寺贊公房 (大雲寺の贊公の房) 四首」(『全唐詩』卷 216)「側塞被徑花, 飄飄委墀柳 (側塞たり徑に被さる花, 飄飄たり墀に委ぬる柳)」, 同じく杜甫「阻雨不得歸瀼西甘林 (雨に阻まれて瀼西の甘林に歸るを得ず)」(『全唐詩』卷 221)「虛徐五株態, 側塞煩胸襟 (虚徐なり五株の態, 側塞として胸襟 煩なり)。「捉季布伝文」(『敦煌變文集』所収)「今受困厄天地窄 (今困厄を受けて天地窄む)。「窄」の字を別卷では「側」に作り, 字は異なるが意は同じ。敦煌文書「菩薩蛮¹¹⁵」「宇宙憎嫌側, 今作蒙塵客 (宇宙は側むるを憎嫌し, 今蒙塵の客と作る)」もまた, 宇宙は逼迫しており, 身を寄せる場所がないとの意。「側」といい「塞」というのを合せると「側塞」である。張衡¹¹⁶「西京賦」(『文選』卷 1 賦甲・京都上)「駢田逼仄 (駢田逼仄たり)」, 「逼仄」は「側」, 「駢田」は「塞」の意である。「側塞被徑花」は, 道端に植えてある花が盛んで, 伸びて道に被さるの意。「側塞胸襟煩」は, 雨に阻まれて帰れず, 甘林を想って気が塞ぐこと。

13. 長短 cháng duǎn

とにかく、またはいずれにせよ、の意。薛道衡¹¹⁷「夜作巫山詩（夜巫山の詩を作る）¹¹⁸」（『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷5）「若為教月夜，長短聽猿声（若為せん月夜をして，長短 猿声を聴かしむるを）」、いずれにせよ猿声を聞くの意。白居易「即事寄微之（即事 微之に寄す）」（『全唐詩』卷441）「飽暖飢寒何足道，此身長短是空虛（飽暖飢寒 何ぞ道うに足らん，此の身は長短是れ空虛なり）」、いずれにせよ空虛であるとの意。同じく白居易「酬嚴十八郎中見示（嚴十八郎中に示さるるに酬ゆ）」（『全唐詩』卷442）「承明長短君応入，莫憶家江七里灘（承明 長短 君応に入るべし，憶う莫かれ家の江七里灘にあるを）」、結局は承明殿にはいるべきで，故郷を恋しがってはならないとの意。同じく白居易「送韋侍御量移金州司馬（韋侍御の金州司馬に量移せらるるを送る）」（『全唐詩』卷440）「莫恨東西洶水別，滄冥長短擬同歸（恨む莫かれ東西洶水別るるを，滄冥長短 同に歸さんと擬す）」、洶水は一時期東西に分かれるが，最後は海に流れつき，再会する時を得るの意。李商隱「櫻桃花下」（『全唐詩』卷540）「他日未開今日謝，嘉辰長短是參差（他日未だ開かずして今日謝す，嘉辰長短是れ參差なり）」は，いずれにせよ花が開く日に遭うことができなかつたとの意。同じく李商隱「楚吟」（『全唐詩』卷539）「楚天長短黃昏雨，宋玉無愁也自愁（楚天 長短 黃昏の雨，宋玉 愁う無きも也自ら愁う）」は，いずれにせよ黃昏時の雨の景色を詠じる。陸龜蒙「水鳥」（『全唐詩』卷621）「慙慙謝汝莫相猜，歸來長短同群活（慙慙として汝に謝すれば相猜う莫かれ，歸り來たりて長短群活を同にせん）」、いずれは歸隱しておまえと連れ添うの意。羅隱「遣興（興を遣る）」（『全唐詩』卷661）「何堪罹亂後，更入是非中。長短遭譏笑，迴頭避釣翁（何ぞ堪えん罹亂の後，更に是非の中に入るを。長短 譏笑に遭わば，頭を迴らせて釣翁を避けん）」は，世間にいればいずれ嘲笑されるので，平和も戦乱も気にとめず釣翁¹¹⁹の話聞く耳も持たないとの意。司空圖「狂題二首」（『全唐詩』卷633）「長短此身長是客，黃花更助白頭催（長短 此の身は長く是れ客，黃花 更に助く白頭の催さるるを）」は，いずれにせよ我が身はこの世ではかない客であり，一年に一度咲く菊の黄色い花が私の髪を白くするのをどうにもできないとの意。

おわりに

以上の十三例において、『新撰字鏡』、『和名類聚抄』、『類聚名義抄』といった代表的な古辞書にも訓が無い用例が多いため，新たに訓を付けた。従来日本では古訓の影響力が強いために，意味が異なっている場合でも代表的な訓を用いて解釈することが多く，意味が著しく異なる場合に限っては意味から訓を付すという習慣があった。しかし以上に挙げた例のように，主だった意味とは乖離した意味も多いことから，今後は従来の古訓に捕われずに，新たな訓を作り出し，それを共通認識にしてゆく必要もあると思われる。

注

- 1 719～772，字は次山，河南（河南省洛陽市）のひと。
- 2 『全唐詩』（中華書局，1960年）。以下，唐詩の引用にはすべて本書を用いた。
- 3 773～819，字は子厚，河東（山西省永濟県）のひと。
- 4 『四庫叢刊初編』（上海書店，1989年）所収。
- 5 王念孫『広雅疏証』（中華書局，1983年）。
- 6 『校正宋本広韻』（芸文印書館，1998年）。
- 7 こたえるとの意味，「応」字に通じる。
- 8 『方言箋疏』（中華書局，1991年）のこと。
- 9 1287～1364，字は可用，湯陰（河南省湯陰県）のひと。
- 10 『景印文淵閣四庫全書』（台湾商務印書館，1983～1986年）集部『圭塘欵乃集』所収。
- 11 『四庫全書』所収『圭塘欵乃集』には見えない。
- 12 1298～1369，字は伯温，饒州鄱陽（江西省上饒市）のひと。
- 13 許有壬は致仕した後，相城の西に康氏の廢園を得た。そこで池を造った際，池の形状が桓圭に似ていたことから庭園を「圭塘」

と名づけて、弟の有孚や友人らとこの庭園に遊び、詩を唱和したという（周伯琦『圭塘欵乃集』原序）。

- 14 712～770, 字は子美, 鞏県（河南省洛陽市南）のひと。
- 15 徐時儀校注『一切経音義三種校本合刊』（上海古籍出版社, 2008年）。
- 16 郭在貽『敦煌變文集校義』（中華書局, 2002年）。
- 17 生卒年未詳, 名は可久, 字は慶餘。越州（浙江省紹興）のひと。
- 18 812?～858, 字は義山, 号は玉谿生, 懷州河内（河南省沁陽県）のひと。
- 19 『全唐詩』は「慟」につくる。
- 20 逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局, 1983年）。
- 21 481～539, 字は孝綽, 本の名は冉, 彭城（江蘇省徐州市）のひと。
- 22 505～548, 字は世挙, 南朝・梁のひと。陽霍（河南省禹州市）のひと。
- 23 原文には「互文」と記す。互文は「対の形になった二つの句や文で、その一方で述べてあることを他方で省略し、たがいに補いあって意味を完全にする、文章の構成法」（藤堂明保編『漢和大事典』, 学習研究社, 1978年）で、『漢和大事典』ではその例に「天長地久」の語を挙げる。
- 24 生卒年不詳, 字は希聖, 東斎と号した。睦州分水（浙江省桐廬県西北）のひと。
- 25 『全唐詩』は「古曲五首」に作る。
- 26 718?～771?, 字は茂政, 潤州丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
- 27 生卒年不詳, 字は君平, 南陽（河南省修武県）のひと。
- 28 生卒年不詳, 字, 号ともに不詳, 洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 29 768～824, 字は退之。鄧州南陽（河南省孟州市）のひと。
- 30 1036～1101, 字は子瞻, また和仲, 東坡居士と号す。眉州眉山（四川省眉山県）のひと。
- 31 北京大学古文献研究所編『全宋詩』（北京大学出版社, 1991年）。以下同じ。
- 32 758～836, 字は僧孺, 東海郷（山東省鄒城県）のひと。
- 33 701～762, 字は太白, 青蓮居士と号す。西域に生まれ, 幼少期に蜀の青蓮郷（四川省江油県）に移り住んだと言われる。
- 34 宋・趙次公『杜詩趙次公先後解輯校』（上海古籍出版社, 2012年）は「已」に作る。
- 35 『叢書集成初編』（商務印書館, 1936年）所収。
- 36 通税とは納税が遅れること, 蠲免とは租税を免除すること。
- 37 生卒年不詳, 字は從一, 趙県（河北省趙県）のひと。
- 38 生卒年不詳, 字は遺直, 京兆（陝西省宝鶏市扶風県）のひと。
- 39 中国語において一音節目と二音節目の頭子音が同じ（双声）, またはその頭子音以外が同じ（疊韻）構造を持つ語のこと。彷彿, 逍遙など。
- 40 701?～761, 字は摩詰, 太原（山西省太原市）のひと。
- 41 『全唐詩』は「像」につくる。
- 42 715?～770, 字は不明, 南陽（河南省南陽市）のひと。
- 43 772～842, 字は夢得, 洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 44 『全唐詩』は「功業莫從就, 歳光屢奔迫」に作る。
- 45 661?～702?, 字は伯玉, 梓州射洪（四川省射洪県）のひと。
- 46 727?～816?, 字は逋翁, 華陽山人, 悲翁と号した。蘇州（浙江省蘇州市）のひと。
- 47 枳岐然のこと。720?～?, 字は清昼, 湖州（浙江省呉興県）のひと。
- 48 624～705, 唐・高宗の皇后。
- 49 生卒年不詳, 字は彌性, 江都（江蘇省揚州市）のひと。
- 50 唐圭璋編『全宋词』（中華書局, 1965年6月）。以下同じ。
- 51 『六十種曲』（中華書局, 1958年5月）。
- 52 曾瑞, 字は瑞卿, 生卒年不詳, 元曲『王月英元夜留鞋記雜劇』の作者。
- 53 出典不明。『全元散曲』（中華書局, 1964年）に見えず。
- 54 854～?, 字は礼山, 浙江省富春江あたりのひと。
- 55 呂温の誤り。呂温, 772～811, 河中（山西省永濟市）のひと。

- 56 『全唐詩』は「晋」に作る。
- 57 766 ? ~ 831 ?, 字は仲初, 潁川 (河南省許昌市) のひと。
- 58 766 ? ~ 830 ?, 字は文昌, 和州烏江 (安徽省和県) のひと。
- 59 779 ~ 831, 字は微之, 河南 (河南省洛陽市) のひと。
- 60 846 ~ 904 ?, 字は彦之, 九華山人と号した。池州石埭 (安徽省太平県) のひと。
- 61 832 ~ 912, 字は徳隠, 婺州蘭溪 (浙江省金華市) のひと。
- 62 『全宋詞』は「木蘭花令」「宿造口聞夜雨寄子由才叔」に作る。
- 63 772 ~ 846, 字は楽天, 香山居士, 醉吟先生と号した。下邳 (陝西省渭南県) のひと。
- 64 842 ? ~ 923 ?, 字は致堯 (または致光), 玉山樵人と号した。京兆万年 (陝西省西安市) のひと。
- 65 『全唐詩』は「交」に作る。
- 66 生卒年不詳, 字は伯遷, 池州 (安徽省池州市) のひと。
- 67 809 ~ 888, 字は雄飛, 号は玄英, 睦州青溪 (浙江省淳安県) のひと。
- 68 魏・何晏注, 宋・邢昺疏『論語注疏』(北京大学出版社, 2000 年)。
- 69 周・左丘明伝, 晋・杜預注, 唐・孔穎達正義『春秋左伝正義』(北京大学出版社, 2000 年)。
- 70 漢・司馬遷『史記』(中華書局, 2014 年)。
- 71 『全唐詩』は「鶯花啼又笑」に作る。
- 72 呉僧釈文瑩, 字は如晦。
- 73 『全宋詞』は「住」につくる。
- 74 中国戯劇出版社, 1958 年 6 月。但し一集に収めている。
- 75 『馮夢龍全集』(江蘇古籍出版社, 1993 年) 所収『挂枝兒』感部七卷「茉莉花」。但し「花兒採到手, 花心還未開。早知道爾無心也。花, 我也畢竟不來採。」に作る。
- 76 『醉醒石』(中国古典小説研究資料叢書, 上海古籍出版社, 1956 年 8 月)。
- 77 『二刻拍案驚奇』(上海古籍出版社, 1983 年)。但し本文は見えず。
- 78 830 ~ 903, 字は夢徴, 舒州 (安徽省潜山) のひと。
- 79 汲古閣影宋鈔『南宋六十家集』所収『汝陽端平詩集』。
- 80 1194 ~ 1255, 字は伯弼, 汝陽 (河南省汝南県) のひと。
- 81 837 ~ 908, 字は表聖, 河中 (山西省永濟県) のひと。
- 82 836 ? ~ 910, 字は端己, 京兆杜陵 (陝西省西安市東南) のひと。
- 83 『全唐詩』は「少」に作る。
- 84 803 ~ 852, 字は牧之, 京兆万年 (陝西省西安市) のひと。
- 85 833 ~ 909, 字は昭諫, 江東生と号した。余杭 (浙江省杭州市北) のひと。
- 86 825 ~ ?, 字は不詳, 余杭 (浙江省杭州市北) のひと。
- 87 779 ~ 843, 字は閔仙, 范陽 (河北省涿県) のひと。
- 88 ? ~ 881 ?, 字は魯望, 江湖散人, 甫里先生などと号した。姑蘇 (江蘇省蘇州市) のひと。
- 89 1190 ~ 1257, 字は裕之, 遺山と号した。秀容 (山西省忻県) のひと。
- 90 姚奠中『元好問全集 (増訂本)』(山西古籍出版社, 2004 年)。
- 91 1140 ~ 1207, 字は幼安, 稼軒居士と号した。歴城 (山東省済南市) のひと。
- 92 1052 ~ 1125, 字は方回, 慶湖遺老と号した。衛州汲 (河南省衛輝市) のひと。
- 93 蔣礼鴻編『敦煌變文字義通釈』第 4 次増訂本 (上海古籍出版社, 1988 年)。
- 94 1018 ~ 1079, 分同, 字は与可, 梓州永泰 (四川省塩亭県東) のひと。
- 95 『宋詩鈔・宋詩鈔補』(三聯書店上海分店, 1988 年) は「黎」に作る。
- 96 1127 ~ 1206, 字は廷秀, 誠齋と号した。吉州吉水 (江西省吉安市) のひと。
- 97 777 ~ 835, 字は持正, 睦州新安 (浙江省杭州市) のひと。
- 98 751 ~ 814, 字は東野, 湖州武康 (浙江省呉興県南) のひと。
- 99 五代・後蜀の帝王孟昶の妃。
- 100 『元曲選校注』(河北教育出版社, 1994 年) 所収。

- 101 喬木から抽出した香。
- 102 781～832？，字は下賢，吳興（浙江省湖州市）のひと。
- 103 生卒年，官籍はみな不詳。炙穀子と号した。
- 104 『全唐詩』は「涙」に作る。
- 105 815～？，字は子遷，江東また台州のひとともいう。
- 106 841？～883？，字は逸少また襲美，襄陽（湖北省襄樊市）のひと。
- 107 900～968，字は孟文，貴平（四川省仁寿县）のひと。
- 108 漢・劉向撰，向宗魯校証『說苑校証』（中華書局，1987年）。
- 109 『唐詩語言研究』（語文出版社，2008年）。
- 110 1126～1193，字は致能，石湖居士と号した。蘇州吳県（江蘇省蘇州市）のひと。
- 111 張耒のこと。1054～1114，字は文潜，蘇州淮陰（江蘇省淮安市）のひと。
- 112 李逸安等点校，中華書局，1990年。
- 113 508～555，武帝蕭衍の子，梁の四代皇帝。
- 114 『金樓子校箋』（許逸民校箋，中華書局，2011年）。
- 115 張璋・黄畊『全唐五代詞』（上海古籍出版社，1986年）所収。
- 116 78～139，字は平子，西鄂（河南省南陽市）のひと。後漢のひと。
- 117 540～609，字は玄卿，河東汾陰（山西省榮河県）のひと。
- 118 『先秦漢魏晉南北朝詩』は崔仲方の詩に作る。
- 119 屈原『楚辭』漁父に登場する漁父をいう。讒言にあっても高潔な身を保とうとする屈原に対して，世の中と同化するよう説く。